

和光高校の職業・技術に関する教育

——高2 選択科目「現代社会と技術」の13年、青年が職業に対峙するとき——

森下 一期

0. はじめに

長引く経済不況の中で失業率は一向に下がる気配はなく、青年の就職難も深まるばかりである。高卒のみならず大卒も含め新卒就職率は低下を続けている。そのような中で高校生は先の見通しももてず、自分が遅からず入っていくだろう仕事、労働、職業に期待や展望が得られずにいる。リストラ、失業のおそれを抱いて自信を失っている大人の姿を見るにつけ、働くことが遠のいていくように高校生たちは感じているようである。しかし、それはマスコミで報道される間接的な情報を得るしかないために生ずることと考えられる。実際、働く人に直接インタビューし、働きがいや生き甲斐を聞き取ると、少なからぬ生徒がそれまでの悲観的な職業観が明るいものへと転換することを書き表す。もちろん、多くの高校生がアルバイトの経験を持ち、働く現場に接している。そこから得るものは多いはずである。だが、単に小遣い稼ぎが目的であって、他のことには目を向けないとしたら、そこで得られることも見えずに終わってしまうおそれもある。

だから、意図的に働くことを見る場を設けることは、青年期の教育においては欠かせないものである。にもかかわらず、高等学校は職業や専門の教育をないがしろにしてきた。学校教育法は高等学校の目的として「高等普通教育ならびに専門教育を施す」としているが、職業（専門）高校においては普通教科と専門教科の学習を単位数も指定して同時に学ぶことを義務づけていながら、普通科においては「設置することが望ましい」ととどまっていた、職業や専門の科目を設置している学校はわずかである。そして、2002年の統計では、71%の生徒が普通科に属しているのだから、圧倒的な高校生が将来の進路選択ができる力を養うべき高等学校で、職業や専門の実際を体験し学ぶ経験をせずにいるのである。

このような現状を踏まえると、現代の高等学校においては、普通科において行うべき、職業に関する教育を創り出していくことが焦眉の課題となるといわざるを得ない。なお、この文脈で見た場合、行政が進めてきている「総合学科」、インターンシップは、問題点は多々あるだろうが、現代の高校生がおかれている状況に対して、生徒の要望に一定の対応をなしているものと私はとらえている。総合学科がこの10年間に180校に拡大したことは、生徒が求めているという実態を反映したものと言える。

ところが、普通科における職業・専門の教育を意図的に創造していく取り組みは寡聞にして聞かない。むしろ、普通教科の授業においてこそ普通科高校が成り立っていくと行った論調を聞くくらいである。

私たちの取り組みはささやかなものである。だが、一つの仮説を持って取り組み、少なくとも現代の高校生が求める学習・活動を展開できているのではないかと考えている。

1. 和光高校における技術・職業の教育の経緯

和光高校では、1978年のカリキュラムから、技術教育に関する選択科目を設置してきている。名称はときによって異なるが、内容的には機械工学、電気・電子工学（最近ではコンピュータ制御）である。当時、必修の技術科設置も俎上に載せたが、そこまでは実現できなかった。（今は、選択でよいのではないかと考えている。）

その後、1991年度から、フィールドワークを含む選択科目の一つに、「現代社会と技術」を設けた。1990年に名古屋大学から和光高校に戻った森下が開設した。近代社会の技術の発展を踏まえながら、生徒たちが職業に目を向け、考えることをねらいとしていた。

そして、1994年カリキュラムを検討するとき、改めて「普通教育における職業教育」を論議することとなった。ここでは、1978年から実践してきた現代的な課題を取り上げる「総合学習」の中に「仕事、職業」を位置づけることと、新たに選択科目枠として「専門教育科目群」を設けることだった。

この「専門教育科目群」は3年の必修選択として設置したので、実際に行うのは1996年度からだった。実施に先立ち、95年度には生徒にアンケートをとった。設置する選択科目に生徒の意向も反映させたいと考えたのは、併行して進めていた、学校隔週五日制の取り組みの中で、生徒

の意向をきちんと受け止めなければならぬと考へたからである。その時も圧倒的多数の生徒がこの選択科目歓迎していた。設置される時には卒業してしまう生徒は、なぜもっと早くやらなかったのか、といった抗議さえしていた。2000年度にこの選択枠を受講した生徒たちにアンケートをとったが、とても良い、良いをあわせると81.5%の生徒が歓迎していた。

社会人講師を多く招き実践している「専門教育科目群」は和光高校の職業・技術教育の柱となるところだが、これについては時を改めて発表させていただくこととしたい。今回は、13年間続けている私の実践「現代社会と技術」を振り返りながら実践の意味と意義を分析してみたい。

2. 和光高校の「A1:フィールドワーク」

和光高校の独自のカリキュラムのベースは1970年に形づくられたと言える。服装問題に端を発した“事件”を契機に生徒の学習欲求にこたえるカリキュラムを創り出そうと取り組まれた。1966年に開学した和光大学の敷地内に移転したこともその取り組みを加速させた。この1970年カリキュラムの特徴は

- ①1年は全科必修とし、2、3年は選択授業を設ける(2年6、3年10単位)。
- ②「教育と生活との結合」をカリキュラムの柱の一つとし、「生活科」を設置する。
- ③生物研究、地域研究、現代文化研究のような調査をとまなう研究学習を発足させる。

といったものだった。

他方で、修学旅行の検討がさまざま行われる中で、1971年「学習旅行検討委員会」が「修学旅行の形式」を一切廃止し、カリキュラムの一環として、教科に組み込まれた「学習旅行」を実施すると提起した。そこには、すでに進められていた1970年カリキュラムでの研究学習の中で出されてきたフィールドワーク旅行を望む声も反映されていた。

そして、1973年、2年生の生物研究、地域研究、地学研究、文学研究、基礎造形、工芸が3泊4日の「研究旅行」を実施する運びとなった。これが現在も継続している「A1」(選択枠名。2002年から「A1:フィールドワーク」と呼称する)の研究旅行である。

その後、1978年に新キャンパス(現在の真光寺)に移転し中学と同一キャンパスとすることを機にカリキュラムを見直し、「総合学習」(生活科を発展改組。当時は2、3年生)を新設し、選択枠を増やすなど(2年10単位、3年16単位)したが、研究旅行を含むフィールドワークを行う選択枠は継続される。そして、現在は、この選択枠を「総合的な学習の時間」の単位に当てることとしている。

「A1:フィールドワーク」の科目は、1991年から12科目となり、現在の科目は、

「ひととことば」「基地問題研究」「農山村研究」「郷土史」「日本古代史研究」「生物研究」「地学研究」「現代の科学」「舞踊研究」「絵画」「工芸」「現代社会と技術」である。2年生6クラス240名が分かれるので、平均20名、定員は25ないし24名にしている。

3. 働く人にインタビューをする——「現代社会と技術」の一学期の課題——

生徒は言う“仕事に対する価値観が変わった”

前記したように、この科目では、生徒に職業に目を向けさせることをねらっている。開設したのは1991年で、今年で13年目となる。初年度は、当時の定員の30名を超える受講者がいたが、呼びかけでも「技術の発展」を前面に出し、技術の学習を意識して展開しようとした。したがって、一学期は技術の歴史を中心に講義をし、二学期に行う多様な形態の工場を見学する研究旅行につなげようとした。しかし、生徒はあまり乗ってこないのである。紡績機械、織機の発達など図版を豊富に示しながら産業革命下の技術の発達を話しても、あまり伝わらなかった。拍子抜けしたが、技術的な課題を扱いながらその歴史的な背景を取り上げるならばもっと違った反応が得られただろうが、技術の歴史、というだけでは関心を引きつけることはできないのかもしれないと思った次第である。

そこで、翌年からは、「働くこと」「職業」に焦点を当て、現に働いている人々にインタビューする取り組みを取り入れた。一学期に二回、授業時間を当ててインタビューに出かけさせた。ここにはいくつかポイントがあるが、一つは自分でアポイントメントを取ることである。インタビューする人を自分で探し(親や友だちと大いに相談させる)、約束を取り付けるわけである。したがって、よほどのことがない限り私が紹介することはしていない。アポイントメントを取ることが大事な学びだと強調している。とは言え、生徒にとってはやっかいなことなので、最初の一回は、親でもよいことにしている。

今ひとつのポイントは、自分なりのインタビューのまとめ方を考えることである。インタビュ

一をまとめる場合、新聞形式にしたり、掲示物にしたりするなど多様にあるが、この授業では文章にすることを基本にしている（図版を入れることもある）。とくに絶対的な理由はないが、多くのインタビュー集が文にまとめられており、その文章表現が聞いたものを一度自分の中を通して表現されているのを見て、生徒にもそういった表現を工夫させたいと思ったからである。具体的には、B4判の4mm方眼用紙2枚に書かせ、裏表に印刷して全員に配布し、読んだ上で、作者に向けてコメントを書くようにしている。10枚、20枚に目を通し、コメントを書くわけだから、なかなか大変である。一時は、ひたすら書いている鉛筆（シャープペン）の音しかしていないという場面も出てくる。

では、具体的な展開と生徒が記したのを見てみよう。

スタッズ・ターケル『仕事』、鎌田慧編『日本人の仕事』、今井美沙子『私の仕事』から読みたい仕事を選ぶ。「誰が石を積み上げてきたのか？——石工」「自然食品店」（年度によって取り上げるものは異なる）は共通に読む。これらを通してインタビューのまとめ方を学ぶ。

自分でアポイントメントを取ってインタビューを2回行う。

インタビューのまとめは、B4ファックス用紙2枚に書き、印刷して全員に配る。コメントを書き、本人にわたるようにしている。

最初に2003年度の生徒がインタビューに取り組み、また仲間の作品を読んでつかんだものを紹介しよう。（下線 森下）

***** Y. N

職業インタビューは、私がこの授業を選んだ理由の一つだったので、やることができ嬉しかった。

最初は誰にインタビューしようか迷って、結構しめきりギリギリのところ母の知り合いの桃太郎の田中さんをお願いした。電話でアポをとる時も、実際にインタビューする時もすごく緊張した。三十分くらいで早々と終わらせようと思っていたのに四時間もお話ができた。長かったけれど、終わったら何だか心がホカホカと温かい感じがして、いい気分が家に帰った。

二度目もやっぱりしめきりギリギリでお願いしてしまって提出が遅れてしまったけれど、終わった後は、これもやっぱりいい気分だった。普段合唱団で歌を教わっているだけの先生の、これまで歩いてきた人生を少し知ることができてよかった。

この二つのインタビューに共通しているのは、インタビュー後の大きな充実感だと思う。その人の秘密を握ったような気がして、おもちゃを独り占めした小さい子のようにニマニマしてしまう。なぜ充実感を得られるのかなと考えたら、その人のこれまでの人生を自分のこれからの人生に生かせるかも！と思うからだ、と気づいた。今の私は、一応趣味らしきこともあるし、将来なりたいなあと思う職業もあるけれど、これから気持ちが変わるかもしれないし、本当になれるのかなという不安などでいっぱいだ。でもインタビューをすることでその行き場のない不安が少し落ち着く気がする。その人が今の状態になるまでには色々な苦労や経験があることがわかって、私はどこかで苦労などを怖がっているけれど、苦労は当たり前で、それを乗り越えることが大事なんだと思う。だから私も怖がらないで色々なことに挑戦しようと思った。もちろん、この気持ちを忘れることもあるだろう。でもその時々で常に思い出すように心がけようと思う。インタビューをしたことは、これから私が将来を考えていく中で、貴重な体験になると思う。

他の人のインタビューも読んで、すごく良かった。自分が調べようと思わない職業や、今まで知らなかった職業もしたし、もっと色々な職業を知りたい！という思いが湧いてきた。最初は読んで感想を書くのが大変だと思ったけれど、実はとても大事なことだということに気づいた。さらに世界が広がるし、自分が調べるだけで終わってはいけないな、と思った。

一学期はとてもいい経験をしたと思う。こんな授業がある学校なんて珍しいといわれたけど、自分の学校にこういう授業があることは、自慢できることだと思っている。

このように働いている人に直接接し、インタビューすることが生徒に大きな影響を与えることわかる。地域での遊びや生活が少なくなり、学校化したと言われる社会の中で、子どもたちはもっぱら家と学校の行き来に終わっていて、身近な親以外の大人と出会うことも少なく、ましてや面と向かって話し、聞き出すといったことはまず無いといえるだろう。考えてみればこんな不幸なことはない。子どもが学ぶのは、本来生活の中であって、学校はそのほんの一部に過ぎないはずである。彼や彼女の周りの大人は悪い部分も含めて教師であるはずである。そこから学ばない手はないのに、子どもたちはそこから遮断されて豊かな学びを剥奪されているというわけである。

学校から地域に子どもを帰すことが彼らの豊かな学びを回復する一つの有効な道と言えるのではないだろうか。ただ、それは何の配慮もせず学校から解き放てばよいと言うわけではない。現在このように学校化している以上、学校から課題を提起し、目的意識を持って地域に、そして大人に接する道筋をつけることが大切だと思う。

Y. Nさんも触れているが、生徒は仕事や職業にあこがれや期待を強く持つと言うよりも不安や疑いを持っている。2年前の生徒だが、それをよく表している。

***** G. A

こんな時代だから自分の好きな仕事をしている人なんて少ないだろうと思っていた。もっと嫌々仕事をしている人が多くて、お金のために仕事をしているという人がいると思っていた。でも、それは私の大きな勘違いであることがインタビューをしてみて、他の人のを読んでみて分かった。少なくとも今回のインタビューの中での大部分の人たちが自分の仕事に誇りを持っていて、お金目的だけで仕事をする人はいなかった。仕事を選んだ理由に「好きだから」とか「興味があるから」とあげる人が多かった。このようなことから私の中での仕事に対する価値観が変わった。仕事というものは、あくまで生活のためにするものだと思っていた。でもそうじゃなくて良いのだ。自分が好きなこと、才能を生かせる仕事をして、その仕事に誇りを持つことが一番大切なのだ。そして、そんな仕事に就くために努力したりすることが大切なのだ、インタビューを通して私は学んだ。もし自分の夢や希望が破れたとしても、新たな仕事で誇りを持つことも可能であって、一生に就く仕事も一つだけでなく、向いていないのなら転職したりするのも良いことだと知った。インタビューをする前の私は仕事に対してマイナスのイメージばかりをもっていた。でも、それは私が周りの働く大人たちをよく見ていなかっただけで本当は多くの人々が仕事に誇りを持っているのだ。リストラをされても新しい仕事でサラリーマン時代よりも楽しく仕事をしている人もいる。仕事は自分の才能や興味、関心、も大切だけど、リストラとか結婚での退職も大切だと知った。出会いとタイミング、これが仕事にも人生にもとても重要になると私がインタビューした人に言われた。今はまだ働くことに対してあまり「ピン」とこないが、私も自分の仕事に誇りを持って働きたいと思った。そんな仕事に出会うため、日々チャンスを見逃さないように、生活しようと思う。

このような感想はかなり多くの生徒が持っている。例えば「なんか、インタビューするまではみんなあんまり仕事に対して関心がないっていうか、そんなに良いモノじゃないように思っていた。だけど、今回インタビューをしたり、みんなのを見たりして、みんな自分の仕事に『誇り』を持ってるなあって思った。」とも書いている。

直接、働いている大人と接することは、現代のように先の展望がもてない時だからこそ、不安に駆られている子ども・青年が必死に取り組んでいる大人と関わりを持ち、事柄を一緒に考えていくといった取り組みが欠かせないと言えるのではないだろうか。

なお、アポイントメントを取ることの大切さを述べる生徒も少なからずいる。そこも、この学習のねらい目である。

4. 夏休みの課題はアルバイトかボランティアの体験記

一般の高校では、公にアルバイトを認めているところは少ないだろう。だが、私は高校生のアルバイトはきわめて重要な社会の学習であると考えている。とは言え、ただアルバイトをすれば学習になるわけでは無いとも考えている。つまり、自分がしていることを客観的に見て、何が自分のものとなったかを考えることが必要である。その視点を提起すると、生徒たちは自分が何を得たかを確認していく。アルバイトを公に認めるから、パート雇用法で保護されていることを教えることもできるのである。

アルバイトの中で、学校では得られない学習をしている生徒は多い。その典型とも思える事例を後で紹介したい。

5. 研究旅行——トヨタ自動車、オークヴィレッジ、野麦峠、歴史の里、蚕糸博物館、宮坂製糸、東芝青梅工場 or 諏訪湖アッセンブリー——

準備：日本の近代産業の発達について講義。 映画「あゝ 野麦峠」のビデオを見る。

宮坂製糸を取材した「紡ぐ心 今も」のVTRを見る。

10月第三週火曜日 出発 トヨタ自動車 トヨタ会館、組立工場見学

- 同 水曜日 オークヴィレッジ 見学とインタビュー
雨が降っても、野麦峠の旧野麦街道 1.3 キロメートルを歩く
松本歴史の里で、工女宿、製糸工場跡、司法博物館を見学
- 同 木曜日 午後岡谷蚕糸博物館見学（午前中は松本城を）
岡谷で唯一残った宮坂製糸場 見学とインタビュー
- 同 金曜日 東芝青梅工場 or 諏訪湖アッセンブリー見学

(1) 研究旅行の構想

研究旅行は現代の機械制大工業と前近代的な軽工業とを比較し、そこでの労働を考えることを目的に企画した。最も現代的なトヨタ自動車の組み立てライン、東芝青梅工場のパソコンの組み立てラインを一つの極とし、対極に製糸工場を置くこととした。当初は富士通のパソコン組み立て工場の見学を依頼したが断られ、友人を通して東芝が受け入れてくれた。東芝の青梅工場は日本で最初にワープロを作った工場として知られており、内橋克人の『匠の時代』に開発の物語が感動的に描かれている。研究旅行最初の年にはそのコピーを生徒に配って学習もさせた。

問題は、受け入れてくれる製糸工場を探すことだった。製糸工場の見学を生徒にさせたいと考えたのは、日本の工場労働の原点は製糸・紡績であり、女性労働、児童労働であるので、そこに目を向けさせたいと考えたからである。中でも、外貨を獲得した製糸が日本の近代化を考える上での原点であるにとらえていた。この構想の中では、是非とも「野麦峠」の旧街道を生徒と一緒に歩いて考え合いたいということも含まれていた。この構想自体は、以前から、製糸労働における工女の養成に関心を持ち、蚕糸博物館の書庫の閲覧もさせてもらうなど、一度ならず岡谷を訪ねていた中で生まれていたものである。

だが、製糸工場そのものにはつてもないので、岡谷市の役所に電話をし、製糸工場の電話番号を教えてもらって、直接交渉することとなった。最初にかけたところは、見学受け入れといったことはしていない、とまったく話にならなかった。二軒目に電話をしたのが宮坂製糸さんだった。それほどやりとりをしたわけではないが、生徒さんに役に立つならかまいませんよ、ということで受け入れてもらうこととなった。

(2) 宮坂製糸さんのこと

まったく偶然に宮坂製糸さんに見学を受け入れていただくことになったのだが（それは 1991 年のことだった）、それが、結局岡谷で唯一の製糸工場になるとはその時は知るよしもなかった。電話を次々にかけてみようと思ったその時は、4 軒あったと思う。関税も撤廃され、一層深刻化した繊維不況の中で、他の工場は次々と閉鎖せざるを得なかった。宮坂さんは、3 年前、次のように生徒に語ってくれた。

「10 年前には 4、5 軒あったんですけど、今日、私んとこだけになっちゃった、ていうことで。

まあ、これはもう、森下先生が私んとこへお見えになったなんてね。わたしとこが最後までやっているとは思わなかったんです。ねー。ほかの工場へ行っておられれば、そこはおやめになっちゃった。というか、あるいはね、先生方がお見えになったもんで、私んとこが最後までやっていたのかもしれないと最近思っています。というのはね、去年もきていただいたんですが、そのときにね、また来年、10 月にね、お見えいただくまで頑張っていなければいけないと思ったもんで。そういう思いもありまして、今までやらせていただいています。」

なぜ、宮坂さんのところだけが未だに続いているのだろうか。それは、私たちがこの工場にこそ見学に行きたかったのだ、と電話口で思ったことにあったとは後で知るところであった。

宮坂製糸工場は、手つむぎの諏訪式座繰りを一部残していた。だから、あの「ああ 野麦峠」で見る工女が手で紡いでいる姿を見ることができるのである。もちろん、機械製糸も。電話口で、これはいいところに受け入れてもらったと興奮したものである。

十年ほどたって、宮坂さんにお聞きしたのだが、昭和 30 年代末に、自動製糸機に入れ替える動きが出て、ほとんどの工場は全面的に入れ替えたということだ。それに対し、宮坂製糸では、糸の検査をする時に座繰機の方が簡単にできるということと、それまで座繰機でやっていたおばさんたちの働く場を全部なくすことはどうだろうか、ということで、一部を撤去せずに残して来たという。

機械製糸は先に記したように関税が撤廃となれば中国などの糸に値段の上で太刀打ちできるわけがない。宮坂さんでも一時は機械は止める事態になっている。ただ、手つむぎの方は、一定の顧客もあり継続することができたのである。もちろん、宮坂さんはこれまでの条件の中にあぐら

をかいていたわけではなく、手つむぎにこそ生き残りの道を見いだし、それまで見向きもされなかった玉繭を使った上州座繰りの導入も図った。NHK『紡ぐ心 今も』の中で語っているが、これまで白い糸を追い求めていたが、色を付けることが課題となっている、とか、これまでは均一な細い糸が求められたが、こぶがあるような個性のある糸が求められている、という新境地に挑戦しているのである。

(3) 研究旅行をより豊かなものに

なお、初年度はこの3工場の見学だったが、次年度から飛騨高山に定着した木工の制作者集団オークヴィレッジを見学し、手工業との比較も行うことができるようにしてきている。

この取り組みの中で、一学期に行っていたインタビューと関連させることも重要であると考え、見学だけでなく、働く人にインタビューをさせてもらうよう依頼した。オークヴィレッジ、宮坂製糸では、快く引き受けていただき継続してできている。実は、トヨタ自動車でも最初の3年ほどは組長クラスの方にインタビューをさせていただいた。これは、手工業のオークヴィレッジとか、70、80歳の方が働く宮坂製糸とかとは違う、「家族のために働く」といった現実的な労働の一端を考えさせてくれる場となっていた。しかし、働く環境の厳しさが進行する中で不可能となってしまった。残念なことである。

(4) 生徒は何を感じたか

さて、この研究旅行の中で生徒たちは何を感じ、何をつかんでいくだろうか。

第一回目の時、ある生徒は次のような感想を書いていた。

「僕はあの経営しているおじさん（宮坂さん）にとっても魅力を感じた。僕がひかれたのはあの言葉では言い表せない笑顔だった。東芝の説明してくれたおじさんの笑顔には、今どんどん進出している東芝のバックがあって誇り高げな感じだった。製糸工場のおじさんに会っていなければこんな印象は受けなかったと思う。製糸業どんどん低下していった中で、焦りも感じられなかったし、あきらめも感じられなかった。悲しみはあると思うけれどそれほど深くは感じられなかった。結局あの目は何だったんだろうと思った。なんていったらいいのかわからないけれど、近代の工場では絶対に出会えないもので、昔ながらの製糸業、そしておばさんたちの雰囲気、仕事の雰囲気から生まれるのだなと思った。それとどうせ仕事をするなら、そんな雰囲気の中であんな目になれるようなところで働きたいと思った。(K. K)」

第一回目の時は、電話での連絡のみで私も宮坂さんに会っておらず、研究旅行の時に初めてお会いしただけだった。先に紹介したような経緯で座繰りが残されていたことも知らなかった。こうやって10年を経て、宮坂さんの取り組み、努力を見てくると、K. K君は見事に宮坂さんをとらえていたということがわかる。7年目のある生徒は、宮坂さんに会った感動を次のように述べている。研究旅行全体の雰囲気を知ってもらうためにも、全文を掲載したい。

***** 研究旅行の感想 F. T

研究旅行の予定、毎日がとってもハードで早く感じた。本当はスケジュールが多くて、ヤダナーと思ったし、絶対に疲れるし、めんどくさいし、本当に毎日こんなのでいいのかなって思った。だけど、一日一日すぎていくたびに、色々学んだことが身についているような気がした。時には、思い出になってしまうことなど。そんな良い体験をしたと思う。

そして、毎日がとっても充実してた。毎日あんな生活をしてたらどうなるんだろう？って思ったし、これは旅行だけのことだからとか思ったりした。そんな生活してないから自分にはちょっと厳しかった気がしたけど、毎日のノートまとめや感想、あんなに熱心に取り組んだのも初めてだった。そして、良いものを書くには集中がとっても必要だと思った。だけど楽しかったし、思い出ができた気がした。毎日がハードでもきっとそれが終われば楽しいことなどがあったと思う。

特に野麦峠に行ったこと。あの日は、本当に寒かったし、お弁当も外で食べられず、結局バスの中で食べた。だけど先生は「歩けばあったかくなるヨ」って言ってた。どんどん歩いていくたび友達とも話がもりあがり、楽しくてしかたがなかった。本当は長い道のりなのに、話していけば長い道のりも早く感じた。だけど本当は冬場でその坂を登ったり、下ったり、もし自分がその時の立場だったら絶対にムリなことだと思った。これは楽しかった思い出だと私は思っています。楽しかった体験、今まで知らなかったことがわかったり、本当にどれもいい思い出だと思った。

だけど、やっぱり一番に残ってるのって、宮坂製糸工場だった。この日は、いつもとかわらぬバスに乗って行った。だけど私を感動させる“わな”があったなんて知らなかった。何食わぬ顔して、宮坂製糸工場に行って、そして先生が「くさい」とか口に出したらいけないって言った

り、色々あった。なんか最初から、へんなふんいきだった。宮坂さんの説明をうけて、工場をまわって、おばあちゃんが一生懸命に蚕の糸をつむいでいて、なんかえらいなって思った。やっぱり普通の老人って何もやらないで家にいるとかが普通だったと思ったけど、その老人を見たとき、すごいとか、大変そうなのにガンバっているとか、一生懸命さが伝わってきた。だけど、次々に場所を変えるたび、蚕のにおいもだんだんときつくなっていった。その時、私はもう次の場所には行けないと思い、本当に行けなかった。みんなが帰ってくるまで外にいた。

それから、それぞれ班にわかれて、働いている人の話を聞くことになった。私の班は宮坂さんだった。なんか話を聞いていたら、つい涙がいっぱいこもってた。それは宮坂さんの話している内容が、私を感動や悲しみの渦に巻き込んでいったのだ。これは宮坂さんが説明したからだと思う。宮坂さんのあの優しい気持ち。そして、あせらずマイペースで、しっかりと自分をもっていたと思った。だけど、つらいこととかあまりないって言った宮坂さんには、働く人がいるからだと思った。「みんながたのしく、元気で仕事をしていたら、私にとってとってもうれしいことだ」って言っていた宮坂さん。とっても心のあったかい人だと思った。製糸工場なんてめったにないし、かなりのいきおいでピンチをまねいてると思ったけど、それは本人もわかっていたけど、弱音をはくわけでもなく、さすがこの仕事をやるだけの人だと思った。インタビューしているときも、ニコニコ笑ってくれて、逆に私には、それがとってもつらかった。

だけど、本当にガンバってほしいし、まけないでほしい。宮坂さんのことだから、まけないと思うし、働いてる人もみんなで助けあって製糸工場を続けてほしい。なんか自分もこのとき、とってもあったかい気持ちになれた。だから「くさい」とか言ってしまったこと本当に悪いと思っています。私にとって、研究旅行の中で一番思い出になったと思います。

先生、宮坂さん、良い体験をありがとうございました。

こうして研究旅行は終わっていった。今も心に残っている旅行、本当によかった。

久しぶりに感動、そして楽しいこといっぱい、いっぱい、一気にあった。そしてハードだった研究旅行だったけど、全部がよい体験になれた、と思えて嬉しかった。

2002年度の生徒も宮坂製糸の見学とインタビューを通して現代の産業について考察している。製糸業の置かれている現状が、生徒に思考をうながしていると言えるだろう。

***** K. M

中でも、私が一番強く印象に残ったのは、三日目に長野で見学に行った、宮坂製糸工場です。一日目に見学をしたトヨタ自動車元町工場というのは、今の日本が得意とする分野である、ロボットや機械等の人間が造り出した最先端技術を駆使し、大人数で働いていました。それと相反し、二日目に見学したオークヴィレッジは、この急速に自然が失われて行く世の中で、自然と触れ合う機会を、そして自然自体を大切にしようと、天然素材により、手造りで家具を作っていました。その心細やかな精神が、出来上がった家具に宿っているかの様に、どの製品も暖かい安心感を与えてくれるものばかりでした。けれども、手造りで行っているのも、やはり売値は結構なものらしく、今の値下げ競争に力を費やしている社会の中で、その点は問題の一つの様でした。この様に、全く正反対の性質を持った所を見学した私には、宮坂製糸場というのは、丁度二つの中間地点の立場に立っているのでは、という印象を受けたのです。

宮坂製糸場は、ヨーロッパ式等の機械を取り入れながらも、昔ながらの日本の伝統である手動式のものも健在しており、両方を用途に応じて上手に使っています。このような柔軟さが、製糸工業が衰退していく中、今も岡谷で唯一製糸場を開き続けていられる理由の一つなのだろうと思いました。

宮坂製糸場で、私達の班は宮坂さんにインタビューさせて頂きましたが、その中で宮坂さんは「若い人たちは、この仕事はしたがないので、今働いている人達は、昔からここで働いている、お年寄りの方が多い。後継者がいないことにも困っています。」とおっしゃっていました。それだけではなく、日本の製糸工業は、中国との競争に負け、十年先には、現在全国で七つある製糸工場も、三つ位になってしまうのではないかと、とも言っていました。その問題には、日本と中国の賃金の差と、両国の若い世代の人々のやる気の違い、そして政府の製糸業や農業等に対する力の入れ方等が深く関わっているのではないかと私は思います。

昔、日本で製糸業が盛んだった頃というのは、まだ日本は国としての体制が定まっていなく、若い人々の「日本をつくるんだ」という意識が色濃いものだったと思います。けれども、今の若い世代の人々は、ある程度、もう日本が経済的に発展し、安定している時代に生まれ育ってきているので、その様な意識は薄いのだと思います。ですから、現在の日本をつくり、支えてきた農

業や製糸業等に対してあまり関心がなく、日常の中で自分達が着ている服が、一体いつ何処で、どのようにしてつくられているのか、等と、考えることもなく、「自分達が服をつくらなくても、何処かで作って着ているのだからそれで良いや」という、まるで最初から製品が完成された状態のまま、何処かから生まれてくるものであるかの様な意識を持っているのではないのでしょうか。そうした考えが、「自分達でつくらなくても、輸入すれば良い」という日本という国自身の考えへと繋がっているのでしょうか。そういった意味で言えば、現在の中国は、かつての日本の様に、製糸業に対する民衆の関心があり、国としても力を入れているのだと思います。その様な状態で、日本が中国との競争に負けてしまうのは、至極当然なことと言えるでしょう。けれど、必要なものは自分自身で作り出さなければ、日本は他国に依存し、やがて衰退していくでしょう。そうならない為にも、私達は製糸業や農業等、生活して行く上で、日本で昔から営まれている職業に目を向け、大切にしていかなければならないのです。この旅行で“自分の力でものを産み出すこと”の重要性をとて強く感じました。

(5)なぜ宮坂製糸が生徒を惹きつけるか

このように、宮坂製糸が研究旅行の中心となり得るには、いくつかの要因があると思われる。第一は、旅行全体をそこを軸に組んでいることが挙げられる。旅行前には映画『ああ 野麦峠』のVTRを観せ(最初の3・4年は文庫本を夏休みに読むことを課題としていた。感想文の提出は年とともに少なくなって、あれだけの厚さのものを読み通すのはかなり困難なようなので、最近はやめている)、旧野麦街道を歩くことをあらかじめ宣言している。事前学習として、日本における近代工業の起こりを、富岡製糸場、十機紡績などを取り上げ、講義している。日本の近代化をうながした外貨獲得が原料も国内でまかなえた製糸業によることも考察しておく。そして、『ああ野麦峠』の撮影に使われた工女宿宝来屋も見学する(松本歴史の里に移築されている)。このように、“仕組んでいる”のである。

だが、生徒はそういった教師が仕組んだことにそんなに簡単にのるものではない。そこに、生徒を惹きつけるものがなければ感動は生まれない。やはり宮坂製糸そのものが生徒を惹きつけるのだらう。

それは、70歳、80歳のおばあさんが現役で働いていることである。トヨタ自動車やオークヴィレッジではせいぜい40~50代までの人たちの姿を見てきた。彼や彼女たちにとって当たり前前の光景であったらう。でも、宮坂製糸では、おそらく、エッと思ったのではないだろうか。老人は家にいるもの、といった観念からは、宮坂製糸のおばあちゃんたちの姿は想像できない。そのおばあちゃんたちが、働く生き甲斐と喜びを語るのだから、これまでの観念を揺さぶられたのではないだろうか。これが宮坂製糸に惹きつけられる第二の理由のように思う。

そして、第三は、初年度にK君が見抜いていたように、宮坂さんの日本の製糸業と共に生きようとする姿だらう。K君はそこに、闘いではなく静かな願いを感じたのではないだろうか。企業でありながら、伝統工芸を守り育てようとする姿を感じたのではないかと思う。彼がいみじくも書いているように宮坂さんの「笑顔」にそれを感じさせるものがあるのである。でも、それは単に見た目の「笑顔」ではなく、宮坂さんが大事にしてきた「働くおばあさんたちの喜び」と「日本の製糸業」に裏打ちされた重みを持ったものだった。その「笑顔」こそが生徒たちを惹きつけて離さなかったのではないだろうか。

(6)「現代社会と技術」の授業とは

この「現代社会と技術」の授業はかなりハードだと思う。私のつたない講義を聴くことはほとんど無いから、その責め苦はない。しかし、ひたすら読み、ひたすら書くという課題がある。少なからぬ生徒が音を上げる。でも、それを承知で選択したのだらうと切り返すのだが、ぶつぶつ言う声は途絶えない。にもかかわらず、最後には「書くことができるようになった」「この選択授業をとって正解だった」と書いてくれている。現実に触れさせることの教育力を改めて確信している次第である。

なお、授業論としては、教師の言葉を聞いて学ぶのではなく、自分から足を使って学びに行くという学び方があったのだと気づかせることもねらっているところである。

6. 一年間のまとめは最低400字原稿用紙15枚以上のレポートか10分程度のビデオ作品(シナリオも要求している)を課している。

ここでは、アルバイトなどの体験か、足を使って訪問して得たものを必ず含めることを条件としている。この条件は、レポートなどを一段と深みのある、意味あるものとしている。レポートを書くに当たっては、比較（時間的、地域的、対象の相違）といったことを踏まえることを示唆している。ちょっとしたことだが、その視点が高校生にもよく理解され、見事な作品となっている。紙数の関係で紹介することはできないが、一つだけ、掲載しておきたい。

これは私が課したレポート課題に必ずしもこたえたものとは言えない。しかし、私がこの授業でつかんでほしいと願っている内容をつかみ取っている作品である。夏休みに課したアルバイトかボランティアの体験記の延長上でかかれたものであり、その内容から年間のまとめとして受け入れたものである。

***** 「バイトと私」 N. J 君

僕はアルバイトを始めて、そろそろ一年たちます。ガソリンスタンドで働いていて、辞めようと思ったことは一度もありません。スタンドで働くことはとてもつらいです。なぜなら、夏場は炎天下の中、動きまわり、冬場は洗車などの水仕事をして、手の感覚がなくなってきたりします。特に、夏休みでは、10時から18時の8時間労働で、そんなに長く働いたことのなかった僕は、泣きたくなることもありました。8時間労働といっても、8時間まるまる立ちっぱなしというわけではなく、2時間に1回、10分の休憩と、昼時には飯休憩もあります。が、店が混んでくると2時間に1回が、3時間に1回になったりします。

そうすると、水分補給するチャンスがなくなり、喉が乾くというより、口がカラカラになってきます。わずかにしみ出してくるツバをコクンと飲み込んだり、スキを見て水道水の水を飲んだりして、汗もダラダラ垂れてきながら、洗車の拭き上げをしていました。夏場はよく働いたと自分でそう思います。自分は汗っかきなのかな？と思うほど暑かったのを覚えています。でもはじめてのことだらけだったので、いやになったりはしませんでした。もともとスタンドで働くことに憧れていたもので、少しは覚悟はしていたんだけど、あのつらさは想像以上です。

想像と違ったことはまだあります。前々からスタンドはガソリンだけ売ってれば、潰れることはないと思っていました。だってガソリンを必要とする自動車は、腐るほど街を走っているんだから……。しかし、この考えは大間違い。だって、1リッター100円そこそこのハイオクガソリンを40リッター入れたとします。そうすると消費税込みで、だいたい4千2百円くらいです。その4千2百円のうち、店に入ってくる利益は、ガソリンの原価を引いても、3千円くらいだと思っていました。が、その考えがすでに間違っていたのです。40リッターのガソリンが出たとして、ガソリンの原価を引いたとしても3千円ほど。その3千円からさらに様々な税がかかりにかり、結局店に入ってくる利益は、500円ほどです。40リッター売って5百円ですよ？1時間に10台来ても、5千円も利益は上がってこないのです。確かに混んでくれれば1時間に30台くらいは来店します。それでも総合的にみて1時間に10台くらいが相場でしょう。そのわずかな利益から僕たちアルバイトの人件費がひかれると、まったく残りません。さらにうちの店は24時間営業なので、夜勤の人たちの人件費を考えると完全に赤字です。深夜にお客なんてほとんどが来ないし、夜勤の人たちには、夜勤手当がつくので、僕たちの時給より割高です。お客としては深夜にスタンドがやっているのは嬉しいだろうけど、夜勤で利益など皆無なので、月に40万近い赤字が出るそうです。そのため、この3月いっぱい24時間営業を打ち切るそうです。まあ、最近は24時間営業のセルフスタンドが多く開店しているので、赤字が減ることを考えれば、24時間を止めるのは賛成です。夜勤の人達には悲しいそうだけど……。

ではなぜそんな少ない利益で店が経営できるのか疑問に思うでしょう？そのわけはメンテナンスと呼ばれるガソリンとは違うところからあがってくる利益があるからです。そもそもメンテナンスとは、洗車やエンジンフードにあるもの（エンジンオイルやバッテリー等）を売ったときの利益のことです。このメンテナンスにはガソリン税がかからないので、ガソリンを売るより多くの利益が上がってきます。その為僕たちバイトの給料はメンテナンスから払われていると言っても違いはありません。スタンドはガソリンを売っているだけではだめなのです。

経営部の方からも「メンテを売れ！」とFAXを毎日送ってきます。メンテをあげる為に経営部は競争させる方法をとっています。毎日10時、14時、18時に経営部から電話があり、メンテの販売状況を東京の各支店（全部で35支店くらい）に聞き、集計して全支店にFAXします。その時販売の調子の良い支店はほめ、悪い支店はけなします。販売状況の悪いMG（店長）はレベルの低いMG、販売能力の無いMGとして扱われ、プライドを傷つけられ、他のMGに頭があがらなくなります。さらに東京支店の中でワースト3くらいでウロウロしてる支店のMGは他店に

とばされ、一社員として働かされるそうです。一度MGまで上り詰めたのに店のメンテ販売状況が悪く、MGを降格させられることは、ジョモ社員として最大の屈辱だ、とジョモ社員のE氏はその経験があるそうです。僕は経営のシステムを垣間見た気がしました。年功序列で昇級しても結局最後は実力がなければ勝てない弱肉強食の世界なんだなと思いました。経営部に食われないように、MGは毎日死にもものぐるいで働いているんだな、と思いました。もしジョモでバイトしていなかったら、僕は将来負け組に入っていた気がします。働いて金をもらうことを甘く見ていた自分に気がつきました。

バイトといっても社員と同じ金をもらったいるので、一人前になりたいと思いました。なぜならお客から見れば、ジョモのツナギさえ着ていればもうプロなのです。新人だろうとやり手の社員だろうと関係なく、もういっばしのスタンドマンなのです。それに気付いた僕は急に恥ずかしくなりました。なぜなら今までの僕はプロと呼ぶにはあまりにもひどすぎたからです。サンリオピューロランドどこですか？と聞かれてもパッと返答できず、ガソリントクのキャップが堅く締まっていて、自分の力ではあけられず先輩に頼ったり、些細なことも一人でこなせない甘ったれたガキだったのです。

バイトを始める前は、一人前にできなくてあたり前だからじょじょに慣れていけば良いと思っていた考えが甘かったのです。スタンドでいう一人前というのはメンテをあげて経営にたずさわってこそ、やっと使えるようになってきたぐらいなのです。ガソリンさえ売っていれば良いと思っていたあの時の考えが未熟で自分が悲しくなりました。

その時からプロの自覚を持って働くことにしました。自分で好きで選んだバイトなのに、一人前にこなせないのは悔しかったし、何より自分は「車」に対してあまりにも無知でした。うちのスタンドは、給油ノズルが設置式ではなく、天井つり上げ式なのでレギュラーとハイオクの場所が分かれています。BMWやベンツ等ならすぐハイオクだとわかるんだけど、国産車はなかなか微妙です。そして給油口が右か左、どちらについているかも考えなければなりません。先輩は、レギュラーかハイオクか一発で見分け、後から入ってくるお客のことも考えて誘導します。さらに、オレの無知ぶりはある事件を起こしました。洗車の拭き上げが終わり、会計に行こうとして、車のリアビューを見ました。そこにはARISTOとロゴがあり、トヨタのアリストでした。それをオレはアストロと読み違えてしまい、そのまま、「アストロのお客様洗車の方、仕上がりました。」と言ってしまい、アストロのお客さんが、自分の車が仕上がったと思って精算してしまい、ちょっとしたトラブルを起こしてしまい、怒られました。

その日から車の雑誌によく目を通すようになりました。実際買うこともあり、家には20冊ぐらいまでたまりました。最初はバイトに役立つようにと思って始めたことが、じょじょに段々、好きになってきました。テレビのCMでも、黙殺していた車のCMもじっくり見るようになったし、街でバスを乗っている時でも、普通に走っている車を目で追ったりしました。スタンドで働くことに憧れていたはずが、働き出すと、今度は車本体に興味がわいてきました。実際、11月に行われた東京モーターショーも学校をさぼって見に行っただけです。街を走っている高い車やめずらしい車を見つけたときはなにかうれしくなったりします。今ではだいたいの車の車種、メーカーが分かるようになりました。

別にやりたいことがあって和光に入ったわけではなく、なにか好きなことが見つければよいなあ、と思っていたら、見事に見つかりました。バイトOKの和光に入って良かったと思いました。車関係の仕事に就きたいとうっすらと思いましたが、でも趣味が車いじりのサラリーマンでもいいかな、と思っています。とにかく早く18歳になって、普通免許を取ることが今の目標というか、夢です。いつの間にか自分の中の一番大事なものが車になっていました。

ある程度の車に対する知識を得た自分は、スタンドで次のステップに進もうとしていました。スタンドの仕事に慣れてきて、ミスもほとんどなくなった僕にエンジンルーム点検を社員の人が教えてくれました。これはすなわち、オイルやバッテリーを売っておまえもメンテをあげろ、という意味が込められています。メンテは前にも書いたとおり、スタンドの一番大きな収入源です。だから、エンジンルーム点検を教わることは、自分が経営にたずさわる、使えるスタンドマンになる第一歩なのです。オレはうれしかったです。オレの後から入ってきた大学生がオレより先にエンジンルーム点検を教えてもらってメンテをあげているのも、何かイヤだったし、それよりも実際に点検してメンテをあげてみたかったからです。だって格好良いんだもの！一コ上の先輩なんて、さっそうとボンネットを開け、点検し、お客と話しいつの間にか、作業をしていて、メンテ隊長というアダ名がつくくらいメンテをあげています。それができてこそ、本物のプロ、という気がしていたので、エンジンルーム点検は必死に教わりました。だいたいの知識をつめ込み、

いざ点検というわけにはいきません。

まずは来店したお客のボンネットを開けなければなりません。「無料点検を行ってますので点検しておきましょうか？」とお客に聞くんだけど、なかなか開きません。開いたとしても、おすすめトークでかんだり、うまく答えられず、なかなか売れません。よく考えればあたり前です。お客からオイル交換をたのんでくることはほとんどなく、自分たちのトークでお客の考えを変えさせるのです。それにだいたいエンジンオイルやバッテリー交換などは、高く、一万円を超えてしまうことがほとんどです。それほど高額になると、お客も身構えてしまい、絶対安心していいものか疑問に思うはず。そこを俺たちがトークで納得させるのです。一般市民がスタンドで金を使い、スタンドで働いているオレに給料が入り、そしてまたオレが金を使う……そうして社会は動いているので、社会のシステムが自分の目の前で行われていると、実感できました。一般市民も働いてもらった金なので、必要ない物は買いません。自分のような働くことの辛さ、有り難さも知らないようなガキのトークでなんかで、商品を買ってくれる人はいません。

なぜ自分がメンテをあげられないか気付いたのは、エンジンルーム点検を初めて教えてもらったから二ヶ月後でした。商品売ることの難しさを知ったその日、初めてエンジンオイルとバッテリーを売ることができました。そんなオレもメンテをあげ、店のメンテ販売状況も段々順位が上がってきました。

普段は20台と30台をさまよっていた多摩センター店がベスト10に食い込んできました。メンテ販売状況がベスト10に入ることはすごいことです。東京にたくさんある支店の中でベスト10入りはまったくの予想外のことでした。そんな急上昇の大きな理由としてはMGが変わったことです。バイトの時からやってきたキャリアの長いMGに替わってやって来た。新マネージャーはディーラー上がりの車に詳しい人です。名前はIといい、前のMGに比べてとてもいい人です。Iさんは、来てすぐに工具をそろえ、洗車のメニューを変え、洗濯機を大型のに変えました。そしてバイトのレベルアップをはかる為、勉強会を二、三回行い、それに成功しました。ニコ上のS君やO君なんかバリバリメンテをあげるやり手のスタンドマンになってしまいました。

オレも最近は、オイルをちょくちょく売っているけど、初めて売れたときほど感動はしない。その理由はただ単に慣れてきたからではない。お客が満足しているとは思えないからだ。実際の例を挙げてみよう。お客はVWゴルフ。新車らしく、洗車を注文してきた。さらにオイルもチェックしてくれと言ってきた。これはチャンスと押しに押しオイル交換をとった。「何分くらいかかるの？」と聞かれ、「ハイ、30分ほどです。」と答え、了解してくれた。しかしその日は入っている人数が少なく、結局1時間近くかかってしまった。メンテがあがるのは良いことだが、お客が満足してくれなければ意味がない。エンジンオイルなどは効果が実際目で見えるわけではないので、お客は無駄な買い物をしてしまったのではないかと疑問に思ってしまうだろう。それに交換しているときに待たせてしまったら、もう二度とスタンドではオイル交換等をしようとは思わないだろう。スタンドは接客業・サービス業の部類に入る。メンテをあげることもとても大切だが、お客の要望にこたえ、満足してもらって、また来店してくれるよう心がけることの方が大切だ、と思った。

お客を待たせるといえば、年末はヤバかった。年明けに向け、車もキレイにしようというお客がたくさん来て、本当にてんてこまいだった。冬なのにツナギ一枚で過ごせるほど、動き回って暑かった。どれほど忙しかったかという、一時間平均10台は洗車の客が来、待ち時間は一時間ほどだ。洗車の客は車をおいて、どこかに買い物に行ってしまったりする。そんな年末もピークを越え、じょじょに年を明けようとしていた。そんな時、一台の車の洗車の受注を受けた。その車は白のMPVで泡ムートン洗車(千八百円)をたのんできた。しかし前後のバンパーにはびっしりと水アカがついていた。この汚れは泡ムートンでは落ちない。オレは水アカとり洗車をすすめた。そっちの方が高いので店の利益があがるからだ。お客は俺のおすすめをあっさりとして承した。メンテをあげる為におすすめしたのが、何かむしようにMPVをキレイにしたいようになってきた。何台も何台も洗車してきたオレは、だいぶテキトーになっていたのだ。おれはMPVをピカピカになるまで、洗おうと心に決めた。このとき、オレは責任を持って洗車していた。今までは、洗車なんて洗って拭くだけで責任感などみじんも感じていなかった。だけどプロのスタンドマンとして、お客に満足してもらうために全力を尽くそうと思った。MPVは下地が白だったので水アカが落ちればとてもキレイだった。本当にキレイで新車同然だった。ちょっとは時間がかかったが、これならお客も満足してくれただろう。一つのことを責任を持ってやり遂げることがとても素晴らしいことだと知った。このMPVは自分が今までしてきた洗車の中で、一番のできに仕

上がった。

7. おわりに

当初、和光高校の職業・技術に関する教育の全体を表したいと思っていた。だが、改めて、13年前から実践してきている選択授業を振り返ってみて、その実践的な意義を考察する必要を感じた。果たして、典型的な授業実践となっているかどうかかわからないが、毎年、生徒たちが述べてくれる、感動と思考に、確かなものを感じているのも事実である。

授業実践とは、まさに生徒と生身で切り結ぶものである。もちろん道具立てはあるし、それなくしては対等に切り結ぶことはできない。その道具立てと私自身の蓄えてきたものの両者でもってようやく生徒の若い感性に答えることができるように思う。彼らが書き表すものに私を超えるものを感じることができると思うのは思い過ごしであろうか。ここに掲載した彼や彼女たちの言葉を是非検討していただきたい。